

## 【漢検研究奨励賞】佳作

# 平安・鎌倉時代における「發」の字体について

広島大学大学院教育学研究科 言語文化教育学専攻国語文化教育学専修2年 刀田 絵美子

## 序章

### 1. 研究の目的

中国から、漢字を学んだ日本人は、いわゆる「異体字」もそのまま導入し、長年使用してきた。その使用実態を明らかにする研究は、近年の複製本や影印本、図録等の刊行によって、ようやく可能になり始めたところである。

筆者は、漢字一字一字を共時的及び通時的に探究し、日本語史のなかで、正確に位置づけたいと考えている。そのためには、正字体を、また異体字を使用する際に、日本語書記者がどのような認識を持っていたのか、正字体と異体字の分布によって探る必要がある。

本論文は、「發」の旧字体「發」を例に、文献の差と字体の差がどのような関係にあるのかを追ったものである。「發」は、「𠂔」が「𠂔」と、「弓」が「方」と、「𠂔」が「女」とそれぞれ異体関係にあり、字体の位相を見る上で、有効である。

先行研究としては、井上(2005)がある。井上(2005)は、「文字辨嫌」に掲げられた「はつがしら」を手掛かりに、古辞書、正倉院文書、聖語藏経巻を調査し、「はつがしら」を持つ漢字のうち、「發」のみで、「𠂔」が使用されることを指摘している。よって、本論文ではこれを中心に調査した結果を報告する。

両者は、どのような関係にあるのか。『干禄字書』で確認した。(資料1)

資料1『校本干禄字書』



『干禄字書』は、中国で科挙試験に用いる『五経正義』の字体を校正する目的で編まれた『顔氏字様』を整理したもので、中国では実用的な書として広く用いられた。『干禄字書』の「正」とは、「著述文章対応碑碣に用い、憑拠有る正しいもの(進士の考試にはこの体に従うべきもの)」であり、「俗」とは、「籍帳文案券契薬方に用い、浅近で雅言でないもの。いわば当座用である」。<sup>\*1</sup>

日本では、『日本国見在書目録』に名前が見え、『天治本新撰字鏡』や『兵範記』に記述がある。しかし実際の、具体的な影響や利用は不明である。

よって、実際の文献から、文献の差と字体の差がどのような関係にあるのかを調査し、日本における字体の位相<sup>\*2</sup>を明らかにしてみたい。

## 2. 研究の方法

### 2.1 対象とする時代

日本には、飛鳥・奈良時代に書写された文献が少なからず現存する。しかし、字体の位相差を見ることを目的に据えると、飛鳥・奈良時代の文献には現存する資料の種類・量という点で不安が残る。したがって、本論文では、多様な文献が残る平安時代以降を主な研究の対象とした。なお、先学の諸説に従い、次のように時代区分した。

平安時代

初期 794年～900年

中期 901年～1000年

後期 1001年～1086年

院政期 1087年～1191年

鎌倉時代

初期 1192年～1240年

中期 1241年～1290年

後期 1291年～1335年

### 2.2 対象とする資料

調査は、公刊されている複製本、影印本、図録等を用いて行った。その全ては、引用参考文献で時代別に示す。なお、時代の特定は、先行研究を参考に、筆者が行った。

### 2.3 対象とする字

本論文では、「発」と、「発」を含む字を対象とする。「発」を含む字は、「廢」「撥」「撥」の順で多く見られる。今回は直接述べないが、用例を集めることで、「タレ」や「ヘン」がつく際に、どのような差異があるか比較することも可能になると考え、「発」を含む字も考察の対象とする。

### 2.4 文献の性質に基づく分類

本論文では、築島(1963)に示された分類に基づき、文献を分類し、考察の一助とする。築島(1963)では、平安時代の文献を次のように分類する。<sup>\*3</sup>

「公的な文献」と「私的な文献」を横の基準とし、「文芸意識のある文献」と「文芸意識のない文献」とを縦の基準として縦横の交叉分類とした。但しこの基準は例外なしに截然と区別されるというような性質なものではなく、「公的」「私的」何れに属するか不明確なものもあり、又文芸意識の有無という点も、今日から当時の作者の表現意図を完全に追体験することは出来ないわけであるから、何れとも定め兼ねる場合もあるわけである。

又、この表で、「公的な文献」としたのは、勅撰の書物(史書・類書・漢詩文集・和歌集・仏教教義書・本草書など)を始めとし、民間から官に上申した文書、官府から他の官府又は民間に対して伝達したもの、宗教的又は学術的著述の、(草稿本などでなく)完成されたもの(仏教の教義書・歌学書・音義書・音韻書・本草学書・辞書など)等を謂い、こ

れに対して、「私的な文献」とは、各個人が自己の備忘に書き留めて、他人に見られることを必ずしも予想しないような文献（例えば、日記・記録・識語・注記・訓点・草案などの類）や、個人間で取交された書簡の類などをこれに含めるのである。

		公的な表現			私的な表現		
文芸意識のある文献	文芸	漢詩文 日本紀寛宴和		和歌 (平仮名文)			和歌 日記物語
文芸意識のない文献	政治	歴史書 類書 古文書	宣命	記録 (外記日記 戦記等)			
	祭祀	神楽歌	祝詞 記録 (儀式帳の類)				
	宗教 学術	仏教教義書 本草書 歌学書 音義辞書		記録 (法会等の)	識語 注記 草案 仏教歌謡	音義辞書 (片仮名を含むもの) 訓点資料	
	社交			記録 (歌合の)	私文書		私文書
	個人 生活				日記		
文献の性格 表記形態		純粹の漢文	宣命体	変体漢文 仮名交り文	片仮名を用いた文(上欄以外)		平仮名文

本論文では、この説を参考に、文献を次のように分類する。次の番号は、各時代の調査資料一覧で示す番号と対応している。

	公的な表現	私的な表現
文芸	①	⑥
政治	②	
祭祀	③	
宗教・学術	④	⑦
社交	⑤	⑧
個人生活		⑨

## 2.5 凡例

本論文では、「書体」「字体」「字形」を、次のように定義する。

「書体」― 漢字の形に於て存在する社会共通の様式。多くは其の漢字資料の目的により決まる。楷書・草書等。

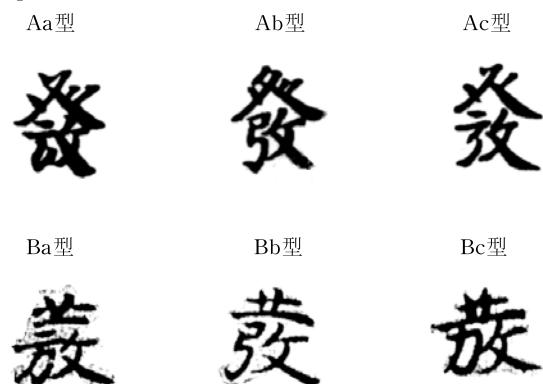
「字体」― 書体内に於て存在する一々の漢字の社会共通の基準。

「字形」― 書体内に於て認識する一々の漢字の書写された形そのもの。

個々の字体は、次の規則に従って、記号化し、把握を行う。

冠が「𦍋」のものをA、「𦍋」のものをBとする。<sup>\*4</sup> 本論文では、冠部を問題としていくが、後の研究のために内部の記述も行う。中が「放」のものをa、「攷」のものをbとし、それぞれの字形を表していく。また、abではないものや崩されて元の字が判断できないものをcとする。cとして様々な字形が想定されるが、本論文では、これ以上の詳細な記述は行わない。

【例】<sup>\*5</sup>



## 第一章 平安時代の「𦍋」字体について

### 第一節 調査資料一覧

調査した文献の内、「𦍋」及び「𦍋」を含む漢字が書記されていた文献を一覧にし、どのような漢字が、どのような字体及び字形で書記されていたかを示した。

【凡例】

- ①「分類」欄の番号は、文献の分類番号を示す。
- ②「調査」欄は、調査した文献箇所を次のように分類した。「全」（文献の全てを見られたもの）、「部」（文献の一部を見られたもの）、「奥」（文献の奥書を見られたもの）、「首」（文献の最初の部分を見られたもの）、「尾」（文献の最後の部分を見られたもの）。
- ③文献は、さきに示した分類番号でまとめ、ジャンルごとに分け、書写年代順に配列した。
- ④同一文献の中で、本文と注に字がある場合は、区別して記述した。その際、「注」欄に「○」をし、「注」に字があることを示す。
- ⑤文献に比較的多く見られる、「𦍋」「𦍋」「𦍋」「𦍋」以外で、「𦍋」を含む字は、「備考」欄に記述する。











分類	番号	書誌情報	書写者	書写年代	調査	A型						B型						備考
						「発」		「廃」		「撥」		「発」		「廃」		「撥」		
						Aa	Ab	Ac	Aa	Ab	Ac	Aa	Ab	Ac	Ba	Bb	Bc	
④	23	唐招提寺藏『法華經 普門品卷第二十五』		～天治二年 (1125)	尾													版経
④	24	奈良国立博物館蔵『藍紙華藏 経卷第五十一』(『泉涌寺経』)		十一～ 十二世紀	部	9		1										
④	25	白鶴美術館蔵『妙法蓮華経 北藏王本事品第二十七』		十二世紀 初頭	全	2												
④	26	鉄舟寺(静岡県)蔵		十二世紀 前半	卷			1										
④	27	藤井永観文庫蔵『華嚴経 卷第四十一』(泉福寺焼経)		十二世紀 前半	首	8												
④	28	寛興寺(福島県)蔵 『一字蓮台法華経卷第二』		十二世紀	首	1												
④	29	花脊別経塚出土 『法華経卷八』残闕		十一世紀	部	1												
④	30	奈良国立博物館蔵『紺紙金銀文書 大藏菩薩巻第六十』(『尊勝経』)		十二世紀	首	1											1	隣接する行に出現する。 変字法か。
④	31	大和文華館蔵『一字蓮台 法華経普賢菩薩勧発品』		十二世紀	部	1											1	題字にBa型
④	32	五島美術館蔵 『観普賢経册子』		十二世紀	部													
④	33	蔵島神社蔵『法華経勧持 品第十三』(『平家納経』)		長寛二年 (1164)	首	2												
④	34	蔵島神社蔵『法華経砂音品 第二十四』(『平家納経』)		長寛二年 (1164)	首	1												
④	35	蔵島神社蔵『紺紙金字法 華経卷八』(『平家納経』)		長寛二年 (1164)	尾													
④	36	蔵島神社蔵『妙法蓮華経 序品第一』(『平家納経』)		長寛二年 (1164)	部													
④	37	蔵島神社蔵『妙法蓮華経 方便品第二』(『平家納経』)		長寛二年 (1164)	部	1												
④	38	蔵島神社蔵『妙法蓮華経 信解品第四』(『平家納経』)		長寛二年 (1164)	首													





## 第二節 調査結果 まとめ

以上の調査結果を踏まえ、平安時代の「発」字体の使用状況について四点にまとめる。

1. 字書類では、A型を用いる。
2. 仏典では、A型を用いる傾向にある。
3. 日記類では、B型を用いる。
4. 字書・仏典、日記以外では、A型もB型も見られる。

## 第三節 考察

以下、第一節でまとめた文献について述べる際は、次のように表す。

(例) 三条家蔵『五臣注文選巻第二十』について述べるとき。

三条家蔵『五臣注文選巻第二十』(表1①1 / (i))

→三条家蔵『五臣注文選巻第二十』は、表1の、分類①の一番目にある。また、(i)として、資料を掲載している。

### 第一項 A型を用いる文献について

調査の結果、字書・仏典類はA型を用いていた。この字体は、『干祿字書』で正字とされたものである。字書・仏典類は、規範性が強く、その意味で『干祿字書』の正字の定義と一致する。字書類で特筆すべき点は、図書寮本『類聚名義抄』(表1④7 / (i))で、「發」の「発」(=「發」字体)が見られる点である。これについては、後述する。

一方で、字書・仏典類の中にも、B型で書かれているものがある。例えば、仏典の奥書では、B型を用いることもある。(表1④48など。)これは、「仏典」の「正」に対し、「奥書」が「俗」に当たするため、と考えられる。また、「仏典」が書写されたものであるのに対し、「奥書」はそうでないため、とも考えられる。

仏典の本文であっても、奈良国立博物館蔵『紺紙金銀交書大般若経巻第四百六十』(表1④30)では、隣接する行にA型とB型がそれぞれあり、変字法\*6を用いた可能性がある。



(i) (表1④7)  
図書寮本『類聚名義抄』



(ii) (表1④1)  
醍醐寺蔵『妙法蓮華経积文』



(iii) (表1④31)  
大和文華館蔵  
『一字蓮台法華経』(題字)

### 第二項 B型を用いる文献について

仏典が多くA型を用いていたのとは逆に、日記類はB型を用いる傾向にある。この字体は、『干祿字書』で俗字とされたものである。

平安時代において、日記や草稿は、他者の目に触れることが前提ではない、私的な文献であった。\*7 自筆本『御堂閔白記』(表1⑨1 / (i))と、自筆・草稿本とされる『北山抄巻十』(表1⑨2 / (ii))では、どちらもB型が用いられており、西暦1000年前後を生きた人物が、平常

ではどのような字を用いたか、ということを実に表している。

第一項と第二項より、『干禄字書』のいう、「正」「俗」の文献の区別と、日本における「発」のA型で書かれる文献、B型で書かれる文献の区別は一致すると言える。



### 第三項 A型/B型のどちらも用いる文献について

同じ文献でも、A型/B型が見られるものがある。

まず、興福寺本『大慈恩寺三蔵法師傳』(表1①14/(i))では、A型が優勢な巻とB型が優勢な巻で差がある。<sup>\*8</sup>『日本書紀』(表1②6、10～18/(ii)は巻十(iii)は巻十二)も、巻ごとに字体が異なっている。

字書類はA型で書かれることが多いため、『干禄字書』の定義した、「正」の文献に属すると思われるが、大治本『一切経音義』(表1④4/(iv))は、A型が優勢な帖と、B型が優勢な帖とに分かれている。

また、最明寺本『往生要集』(表1④54/(v))は、「発」が六十五例あり、巻が下るに従って、A型からB型に移行する傾向にある。



これらは、一つの文献を書写していても、A型/B型に明らかな偏りが無い。つまり、文献と字体とに、一定の対応を持たない。では、何が巻ごとの字体を決定するのだろうか。

可能性があるのは、書記者の違いである。書記者が属する集団の差による可能性もあるが、今回は明確な位相差を見いだすことは出来なかった。また、楷書・草書といった書体の別や、筆の稚拙の度合いと、A型/B型の区別が結びつくわけでもないようである。

文献にA型/B型の字体を決定する要素がない場合、書記者の個人差(=個人による位相差)に左右され、その結果、同じ文献であっても、A型/B型のどちらも見られる、という結果になったのであろう。それが、個人の属するどのような集団の差によるかの検討を行う必要がある。

## 第二章 鎌倉時代の「発」字体について

### 第一節 調査資料一覧

調査した文献の内、「発」及び「發」を含む漢字が書記されていた文献を一覧にし、どのような漢字が、どのような字体で書記されていたかを示した。



分類	番号	書誌情報	書写者	書写年代	調査	注	A型						B型						備考	
							「堯」		「廢」		「撥」		「堯」		「廢」		「撥」			
							Aa	Ab	Ac	Aa	Ab	Ac	Aa	Ab	Ac	Ba	Bb	Bc		Ba
②17		陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全														承德元年秋	
②18		陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全															承德元年冬
②19		陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全															承德二年春
②20		陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全															承德二年夏
②21		陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全															承德二年秋
②22		陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全	1														承德二年冬
②23		陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全															康和四年夏
②24		陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全	○														康和四年夏
②25		陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全															康和四年秋
②26		陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全															康和四年冬
②27		陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全															康和五年春
②28		陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全	○														康和五年春
②29		陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全															康和五年夏
②30		陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全															康和五年冬
②31		陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全															長治元年春
②32		陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全															長治元年夏
②33		陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全															長治元年秋

分類	番号	書誌情報	書写者	書写年代	調査	注	A型						B型						備考
							「発」		「廃」		「發」		「廢」		「發」		「廢」		
							Aa	Ab	Ac	Aa	Ab	Ac	Ba	Bb	Bc	Ba	Bb	Bc	
②	34	陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全	○													長治元年秋
②	35	陽明文庫藏『中右記』		鎌倉初期	全		1					1							長治元年冬
②	36	曆仁本『古語拾遺』		曆仁元年 (1238)	全				3										
②	37	真福寺本『古事記』		鎌倉中期	全		5												
②	38	真福寺本『古事記』		鎌倉中期	全	○	1			2						1			
③	1	唐招提寺藏 『法法勸頂三摩耶戒儀式』		鎌倉中期	首														
③	2	醍醐寺藏『関寺縁起』		十三世紀	部											1			醍醐寺藏 『諸寺縁起十八帖』の一
④	1	前田家本『色葉字類抄』		鎌倉初期	全														
④	2	学習院大学藏 『伊呂波字類抄』		鎌倉初期	全					1									
④	3	大東急記念文庫藏 『孔雀経单字』		鎌倉初期	全			1											
④	4	観智院本『類聚名義抄』		鎌倉中期	全														
④	5	世尊寺本『字鏡』		鎌倉中期	全														
④	6	称念寺藏(福井県) 『無量寿経』		鎌倉時代	部														
④	7	慈光寺(埼玉県)藏『妙法 蓮華経是婆品卷第十二』		十三世紀 初期	首														

※1 「廢」二例、Aa型。「廢」Ab型が各一例。「廢」はAa型、Ab型が各一例。「發」はAa型、「發」Aa型が各一例。「發」Aa型が各一例。cは「弓」+「爿」。

※2 「廢」Ba型が各一例。「發」はAa型、Ba型が各一例。「廢」はAa型、Ba型が各一例。「發」Ac型が各一例。cは「弓」+「爿」。





分類	番号	書誌情報	書写者	書写年代	調査	A型						B型						備考	
						「発」		「廢」		「撥」		「発」		「廢」		「撥」			
						Aa	Ab	Ac	Aa	Ab	Ac	Aa	Ab	Ba	Bb	Bc	Ba		Bb
④	23	仁和寺藏 『護摩要略集上』		鎌倉初期	首						1							内題	
④	24	専修寺藏『唯信抄』	親鸞	承久三年 (1219)	全	2													
④	25	専修寺藏 『西方指南抄』	親鸞	鎌倉中期	全	24	1												
④	26	東本願寺藏 『教行信証』	親鸞	鎌倉中期	全	6													
④	27	東本願寺藏 『三帖和讃』	親鸞	鎌倉中期	全	6													
④	28	大東急記念文庫藏 『光明真言土沙勸信記』	明恵	鎌倉中期	全						1							明恵(1173~1232)	
④	29	仁和寺藏『胎藏界尊号 復金剛界尊号』	聖禪	承久元年 (1219)	首	1													
④	30	妙一記念館本 『仮名書き法華経』		鎌倉中期	全	8				2					1				
④	31	専修寺本 『尊號真像銘文』	親鸞	正嘉二年 (1258)	全	3													
④	32	龍谷大学藏 『黒谷上人語證録』		文永十二年 (1276)	全	40	10				8							版本	
④	33	浄福寺本 『仮名書き往生要集』		鎌倉中期	全												3		
④	34	専修寺本 『選擇本願念佛集』		正安四年 (1302)	全	3	17									1	5		
④	35	唐招提寺藏 『加持土沙作法』		嘉元三年 (1305)	首												2		
④	36	金沢文庫 『寛信法務秘記』		元応三年 (1321)	首												1	2	cの内、一は「弓」+「攴」
④	37	仁和寺藏 『諸尊別業頭次第』		建久七年 (1196)	尾														1
④	38	仁和寺藏 『伝法灌頂三昧耶戒作法』		鎌倉後期	首	1													



## 第二節 調査結果 まとめ

以上の調査結果を踏まえ、鎌倉時代の「発」字体の使用状況について四点にまとめる。

1. 仏典では、A型を用いる。
2. 日記類では、貴族の日記の写本でも、僧侶の日記でも、B型を用いる。
3. 仏典、日記以外では、A型もB型も見られる。
4. 版本、またはそれをもとにして書写されたものはA型を用いる。

## 第三節 考察

### 第一項 A型を用いる文献について

平安時代に引き続き、仏典はA型が用いられる。前述の通り、仏典では正字体を用いる、という意識があるためだろう。一方、平安時代でA型で書かれることが多かった字書類では、B型も多く見られるようになる。

また、平安時代では、図書寮本『類聚名義抄』で一例確認された、「叕」を書く字体は、観智院本『類聚名義抄』(表2④4／(i))では偶数巻で二例、奇数巻で三例確認できた。<sup>\*9</sup> この字体については、後述する。



(i) (表2④4) 観智院本『類聚名義抄』



(ii) (表2④5) 世尊寺本『字鏡』

### 第二項 B型を用いる文献について

陽明文庫蔵『中右記』(表2②1～35)の古写本は、B型を用いる傾向があった。当時の「日記」について、尾上(2003)では、「公的な機関が公式記録や法規・マニュアルを更新しきれなくなった以上、貴族たちは自分の子孫のために、みずから経験・体得した作法や、先祖・親族から伝承した故実の整理と次世代への継承に励むことが必要になった。独自のマニュアルを用意しておかなければ、朝廷に仕える官人として、儀礼化の甚だしい政務を完璧にこなすことができないようになり、「さらに院政期ごろからは貴族社会のなかで徐々に家格らしきものが形成されはじめ、それにとまって家ごとの独自の職能もある程度決まるようになった。つまり、父祖が経験してきた官職に子孫も就くことが普通になり、それぞれの家が独自の方面で活動するようになっていく。そのため、父祖が職務上体得してきた政務の作法や故実がそれぞれの家ごとに重視されることとなり、「家記」(家の記録)と総称されるような、その家にふさわしい内容の日記群が家の記録として蓄積されていくようになる」<sup>\*10</sup>という。



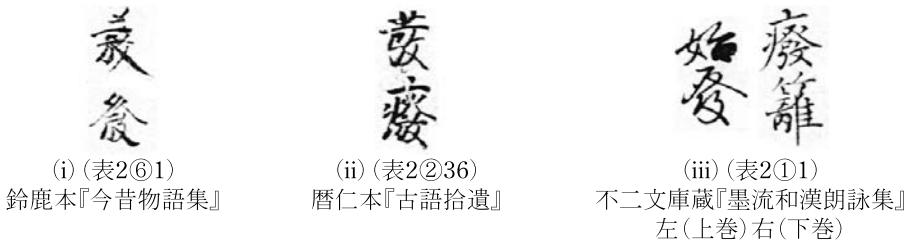
(表2②1～35)  
陽明文庫蔵『中右記』

築島(1963)の分類でも、記録としての日記と、「私日記」は区別されていた。しかし、平安時代の「私日記」、鎌倉時代の僧侶の日記(表2⑨1)、そして記録として書写された『中右記』では、字体の違いが見られない、という結果が出た。

### 第三項 A型/B型のどちらも用いる文献について

鎌倉時代の文献でも、仏典と日記以外の文献では、文献の種類と字体の種類とに、対応はなかった。例えば、鈴鹿本『今昔物語集』(表2⑥1/(i))では、「發」が百八十例あり、百七十九例がB型である。A型の用例は、「悪心ヲ不發スシテ」(巻二)の一例だが、B型でも「心モ不發スシテ」(巻十七)などの用例があるため、文脈による違いがあるとは考えにくい。また、一箇所だけ、変字法を用いたとも考えにくい。

鎌倉時代の文献でも、平安時代と同じく、書体の問題や、筆の稚拙度合いというレベルではない、書記者の個人差によるA型/B型の区別があるのではないか。

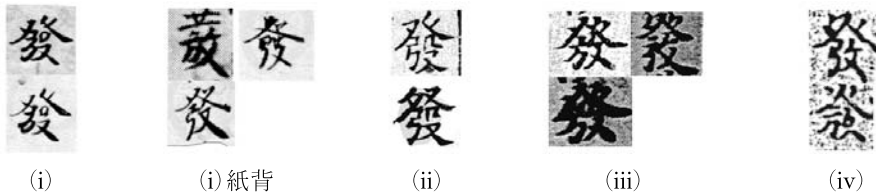


### 第四項 宋版の影響について

観智院本『類聚名義抄』(表2④4)、『五行大義』(表2④20/(i))では、「發」の字体が用いられていた。管見によれば、中国で作成された宋版(ii)\*11で「發」の字体が用いられており、その影響だと思われる。

一方、鎌倉時代に日本で作成された版本の内、仏典の一部(表2④9~12など/(iii)\*12)と、『黒谷上人語證録』(表2④32/(iv))を調査した。それらは全てA型で現れているものの、内部は「攵」を用いており、書写資料の字体と変わらない。また、版本の『法華経』を書写したとされる『仮名書き法華経』(表2④30)も同様である。

中国の版本の影響は、急激に現れるのではなく、先に挙げた文献を中心とする、中国文化に敏感な文献から、徐々に出現した可能性がある。



### 第三章 研究の成果と今後の課題

平安時代から鎌倉時代にかけて、仏典でA型、日記でB型が用いられる傾向にあることを明らかにした点が、本論文の成果である。このことより、仏典と日記では、文献の種類と字体の種類とに一定の対応がある、と言える。

また、これらの区別は、『干祿字書』の定義した「正」「俗」の定義と一致することにも言及した。これまで、日本における『干祿字書』の実際的影響は不明であったが、「発」に関しては、仏典・日記とは字体が一致していることが確認できた。

仏典・日記以外の文献では、字体と文献の種類に一定の対応があるのではなく、それを記述する人物ごとの差が大きく作用する、ということも明らかにした。また、その差が、書体や筆の稚拙の度合いとは別の問題であることも述べた。

今後は、「発」以外の漢字でも、同じ結果が得られるのかを調査する必要がある。

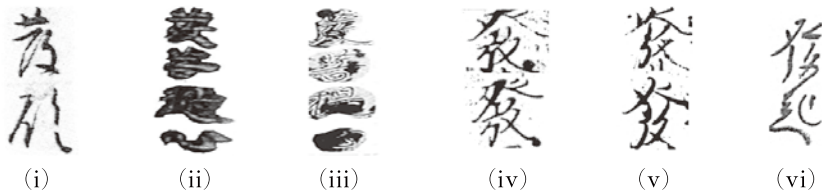
次に、本論文を作成する中での気づきを二点記したい。

平安時代から鎌倉時代にかけて、文献の属する相(文献の性質)によって字体を変えるのは、さきに述べたとおりである。書記者がそのような認識を持っていたため、今回の結果が得られたのであろう。

そのような時代的認識があるにも関わらず、一定の字体を用いる人物がいたのではないかと、というのが一点目の気づきである。平安時代では、藤原道長がそれに当たる。彼は、日記(表1⑨1/(i))、仏典(表1④13/(ii))\*<sup>13</sup>、経筒(表1⑦3/(iii))で、B型を用いたことが確認できた。

また、鎌倉時代では、親鸞聖人がそれに当たる。彼は、教義の注釈(表2②14/(iv))、表2④25/(v))から、消息(表2⑧2/(vi))にいたるまで、すべてA型を用いていた。

両者は、字体研究の上でも、更に詳しく個別の検討を行っていく必要がある。



二点目は、「發」という字体についてである。現在のところ、「発」字体は、「写本」から「版本」への変化に伴い、「叚」は「叚」字体(「發」字体)へと変化したのではないかと考えている。

さきにも述べたように、中国に現存する宋版には、「發」字体が使用されていることが多い。<sup>\*14</sup> 宋版からの影響により、「叚」が現れ、日本で作成された版本の普及により、徐々に広がりを見せ、現在我々が使用している「發」という字につながるのではないだろうか。

鎌倉時代に続く、南北朝時代の資料で、「發」字体を見てみると、書写資料では、「女」が多いものの、懷良親王筆では「叚」が確認できる。<sup>\*15</sup> また、足利尊氏願文<sup>\*16</sup>では、B型と「叚」と

が組み合わされて使用されている。院政期に書写された『日本書紀』(表1②6、11～18/右図上)と、興国二(1346)年に書写された『日本書紀』\*17(右図下)とを比較すると、後者には、「𪛗」が使用されており、仮説を立証するものと言える。



版本で使用される「𪛗」字体については、明らかでない部分が多い。日本に伝来した宋版や、日本で作成された版本についても調査し、通史的な検討を加えていきたい。

## 引用参考文献・データベース

### 【平安時代】

- 有賀要延編『写経願文大成』国書刊行会 1984.7  
石山寺文化財総合調査団編『石山寺資料叢書 一聖教篇第一』法蔵館 1999.3  
石山寺文化財総合調査団編『石山寺資料叢書 一聖教篇第二』法蔵館 2000.10  
貴重図書影本刊行会編『法華経单字』貴重図書刊行会 1933.6  
久會神昇編『不空三蔵表制集 他二種』汲古書院 1993.5  
弘法大師真蹟集成刊行会『弘法大師真蹟集成 縮刷版』法蔵館 1975.6  
弘法大師真蹟集成刊行会『弘法大師真蹟集成 解説』法蔵館 1974.10  
古典研究会編『古辞書音義集成 第四卷 妙法蓮華経积文』汲古書院 1979.11  
古典研究会編『古辞書音義集成 第五卷 法華経音義 三種』汲古書院 1980.9  
古典研究会編『古辞書音義集成 第七卷 一切経音義(上)』汲古書院 1980.11  
古典研究会編『古辞書音義集成 第八卷 一切経音義(中)』汲古書院 1980.11  
古典研究会編『古辞書音義集成 第九卷 一切経音義(下)』汲古書院 1981.7  
古典研究会編『古辞書音義集成 第十卷 孔雀経音義(上)』汲古書院 1981.10  
古典研究会編『古辞書音義集成 第十一卷 孔雀経音義(下)』汲古書院 1983.2  
古典研究会編『古辞書音義集成 第十二卷 金光明最勝王経音義』汲古書院 1981.7  
古典研究会編『古辞書音義集成 第十三卷 香藥字抄』汲古書院 1981.7  
古典研究会編『古辞書音義集成 第十九卷 一切経音義索引』汲古書院 1984.5  
京都帝国大学『京都帝国大学文学部景印舊鈔本 三』1935.10  
京都帝国大学『京都帝国大学文学部景印舊鈔本 十』1935.10  
京都帝国大学文学部『新撰字鏡 天治本』西東書房 1933.2  
宮内庁書陵部本影印集成1『日本書紀 一』八木書店 2005.12  
宮内庁書陵部本影印集成2『日本書紀 二』八木書店 2006.2  
宮内庁書陵部本影印集成3『日本書紀 三』八木書店 2006.4  
高山寺典籍文書総合調査団編『高山寺古辞書資料第一』東京大学出版会 1977.3  
高山寺典籍文書総合調査団編『高山寺古辞書資料第二』東京大学出版会 1983.2  
小松茂美監修『日本名跡叢刊 13 平安 慈慧大師 自筆遺告』二玄社 1977.10  
小松茂美監修『日本名跡叢刊 21 平安 藤原定信 一字寶塔法華経(戸隠切)』二玄社 1978.7

- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 25 平安 藤原朝隆 中尊寺建立供養願文(模本) 南北朝  
北畠顯家 中尊寺建立願文(模本)』二玄社 1978.12
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 30 平安 関戸本和漢朗詠集切 法輪寺切和漢朗詠集 安  
宅切和漢朗詠集』二玄社 1984.6
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 47 平安 藤原伊行葦手下絵本和漢朗詠抄 上卷』二玄社  
1980.10
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 48 平安 藤原伊行葦手下絵本和漢朗詠抄 下卷』二玄社  
1980.11
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 55 平安 伊豫切和漢朗詠集[上卷]』二玄社 1981.10
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 56 平安 伊豫切和漢朗詠集[下卷]』二玄社 1981.11
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 59 平安 近衛本和漢朗詠集』二玄社 1982.2
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 60 平安 藤原忠親 文覚四十五箇條起請文』二玄社 1982.4
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 66 平安 栄西 誓願寺盂蘭盆縁起 平安 誓願寺創建縁  
起 鎌倉 俊苧 泉涌寺勸縁疏』二玄社 1982.10
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 69 平安 粘葉本和漢朗詠集 卷上』二玄社 1983.1
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 70 平安 粘葉本和漢朗詠集 卷下』二玄社 1983.2
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 75 平安 藤原公任 稿本北山抄』二玄社 1983.8
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 76 平安 元暦校本万葉集 卷第一』二玄社 1983.9
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 77 平安 元暦校本万葉集[抄]』二玄社 1983.10
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 78 平安 色紙法華経卷八・裝飾法華普門品』二玄社 1983.12
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 83 平安 太田切和漢朗詠集』二玄社 1979.5
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 93 平安 藤原佐埋集』二玄社 1985.5
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 98 平安 小野道風』二玄社 1985.12
- 財団法人陽明文庫編集『記録文書篇第一輯 御堂関白記』思文閣出版 1983.7
- 財団法人陽明文庫編集『記録文書篇第一輯 御堂関白記』思文閣出版 1983.10
- 財団法人陽明文庫編集『記録文書篇第一輯 御堂関白記』思文閣出版 1984.1
- 財団法人陽明文庫編集『記録文書篇第一輯 御堂関白記』思文閣出版 1984.4
- 財団法人陽明文庫編集『記録文書篇第一輯 御堂関白記』思文閣出版 1984.7
- 築島裕『興福寺本大慈恩寺三蔵法師傳古點の国語学的研究 釋文編』東京大学出版会  
1965.3
- 築島裕『興福寺本大慈恩寺三蔵法師傳古點の国語学的研究 索引編』東京大学出版会  
1966.3
- 築島裕『興福寺本大慈恩寺三蔵法師傳古點の国語学的研究 研究編』東京大学出版会  
1967.3
- 築島裕・後藤剛・坂詰力治『最明寺本往生要集 影印編』汲古書院 1988.6
- 築島裕監修・峰岸明編『古典籍索引叢書 第十五卷 陽明文庫蔵本 御堂関白記 自筆本総  
索引(二)』汲古書院 1995.7
- 築島裕・後藤剛・坂詰力治『最明寺本往生要集 索引編』汲古書院 2003.9
- 日本古典文学会編『日本書紀 卷廿四 皇極』日本古典文学刊行会 1972.9



前田育徳会尊経閣文庫編『尊経閣善本影印集成26 日本書紀』八木書店 2002.4

森本孝順『唐招提寺古経選』中央公論美術出版 1975.9

### 【鎌倉時代】

赤松俊秀・藤島達朗・宮崎圓遵・平松冷三編『親鸞聖人真蹟集成 第一卷 教行信証 上』法藏館 1973.4

赤松俊秀・藤島達朗・宮崎圓遵・平松令三編『親鸞聖人真蹟集成 第二卷 教行信証 下』法藏館 1974.4

赤松俊秀・藤島達朗・宮崎圓遵・平松令三編『親鸞聖人真蹟集成 第三卷 三帖和讃 浄土三経往生文類』法藏館 1974.1

赤松俊秀・藤島達朗・宮崎圓遵・平松令三編『親鸞聖人真蹟集成 第四卷 尊號真像銘文 一念多念文意 書簡』法藏館 1974.11

赤松俊秀・藤島達朗・宮崎圓遵・平松令三編『親鸞聖人真蹟集成 第五卷 西方指南抄 上』法藏館 1973.5

赤松俊秀・藤島達朗・宮崎圓遵・平松令三編『親鸞聖人真蹟集成 第六卷 西方指南抄 下』法藏館 1973.10

赤松俊秀・藤島達朗・宮崎圓遵・平松令三編『親鸞聖人真蹟集成 第七卷 觀經・阿弥陀經集註 浄土論註』法藏館 1973.7

赤松俊秀・藤島達朗・宮崎圓遵・平松令三編『親鸞聖人真蹟集成 第八卷 唯信抄 唯信抄文意』法藏館 1974.4

浅井成海責任編集『黒谷上人語燈録』同朋舎出版 1996.4

石塚晴通解題『古辞書音義集成 第十七卷 孔雀経单字』汲古書院 1983.6

尾崎康・小林芳規解題『群書治要(全七冊)』汲古書院 1989.2~1991.8

川瀬一馬監修『明恵上人手訂定本 光明真言土沙勸信記』勉誠社 1985.7

鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 七』武蔵野書院 1984.5

鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 八』武蔵野書院 1985.5

鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 九』武蔵野書院 1986.5

鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 十』武蔵野書院 1987.5

鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 十一』武蔵野書院 1988.5

鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 十二』武蔵野書院 1989.5

鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 十三』武蔵野書院 1990.5

鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 十四』武蔵野書院 1991.5

鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 十五』武蔵野書院 1992.5

鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 十六』武蔵野書院 1993.5

鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 十七』武蔵野書院 1994.5

鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 十八』武蔵野書院 1995.5

鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 十九』武蔵野書院 1996.5

鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 二十』武蔵野書院 1997.5

- 鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 二十一』武蔵野書院 1998.5
- 鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 二十二』武蔵野書院 1999.5
- 鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究 二十三』武蔵野書院 2000.5
- 川口久雄解説『梅沢本栄花物語(全六冊)』勉誠社 1979.6~1982.7
- 川瀬一馬序・高橋貞一解説『延慶本平家物語(全六巻)』汲古書院 1982.9~1983.2
- 北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語 索引編(上下)』勉誠社 1996.2
- 小泉弘解説『三寶絵詞(上下)』勉誠社 1985.4
- 小島憲之解説『国宝 真福寺本 古事記』桜楓社 1978.1.10
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 29 鎌倉 日蓮 孟蘭盆御書』二玄社 1979.4
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 44 鎌倉 世尊寺経尹西園寺実氏夫人願文 世尊寺定成平行政願文』二玄社 1980.7
- 小松茂美監修『日本名跡叢刊 57 鎌倉 源空消息 證空消息 熊谷直実誓願状 迎接曼茶羅由来』二玄社 1982.12
- 高山寺典籍文書総合調査団編『高山寺本古往来・表白集』東京大学出版会 1972.3
- 高山寺典籍文書総合調査団編『明恵上人資料第二』東京大学出版会 1978.3
- 古典研究会編『古辞書音義集成 第六巻 字鏡(世尊寺本)』汲古書院 1980.3
- 古典研究会編『古辞書音義集成 第十四巻 伊呂波字類抄』汲古書院 1985.11
- 後藤昭雄編集『金剛寺蔵 注好撰』和泉書院 1988.10
- 小松茂美編『続々日本絵巻大成 伝記・縁起編一 善信聖人親鸞伝絵』中央公論社 1994.2
- 真宗高田派教学院編『影印 高田古典 第二巻 顕智上人集 上』真宗高田派宗務院 1999.4
- 天理図書館善本叢書和書之部編集委員会編『天理図書館善本叢書 和書之部57平安詩文残篇』1984.1
- 天理図書館善本叢書和書之部編集委員会編『天理図書館善本叢書 和書之部42九暦・定信公御記抄・九条殿御記』八木書店 1980.1
- 天理図書館善本叢書和書之部編集委員会編『天理図書館善本叢書 漢籍之部2文選・趙志集・白氏文集』八木書店 1980.5
- 中田祝夫・峰岸明編『色葉字類抄 研究並びに総合索引』風間書房 1977.5
- 中田祝夫編『妙一記念館本 仮名書き法華経 影印編(上下)』霊友会 1988.3
- 中田祝夫編『妙一記念館本 仮名書き法華経 索引編』霊友会 1990.2
- 中村璋八・築島裕・石塚晴通解題『古典研究会叢書 漢籍之部第七巻 五行大義』汲古書院 1989.12
- 西田直樹・西田直敏編著『浄福寺本仮名書き 往生要集 影印・翻刻・解説』おうふう 1994.1
- 前田有徳会編『色葉字類抄』前田有徳会 1984.5
- 正宗敦夫編『類聚名義抄(二冊)』風間書房 1978.12~1981.4
- 松村博司・山中裕校注『日本古典文学大系 栄花物語(上下)』岩波書店 1964.11~1965.10
- 安田章編『鈴鹿本今昔物語 影印と考証』京都大学学術出版会 1997.5
- 山田孝雄校注『日本古典文学大系22-26 今昔物語(全五冊)』岩波書店1959.3~1963.3
- 陽明文庫編『陽明叢書 記録文書篇第七輯 中右記 一』思文閣出版 1988.6

- 陽明文庫編『陽明叢書 記録文書篇第七輯 中右記 二』思文閣出版 1988.10  
陽明文庫編『陽明叢書 記録文書篇第七輯 中右記 三』思文閣出版 1989.1  
陽明文庫編『陽明叢書 記録文書篇第七輯 中右記 四』思文閣出版 1989.6

### 【図録】

- 京都国立博物館『金峯山埋経一千年記念 特別展覧会 藤原道長 極めた栄華・願った浄土』  
2007.4  
毎日新聞社「国宝」委員会事務局編『原色版国宝3 平安Ⅰ』毎日新聞社 1969.2  
毎日新聞社「国宝」委員会事務局編『原色版国宝6 平安Ⅳ』毎日新聞社 1963.11  
山本信吉編『国宝大辞典三 書籍・典籍』講談社 1986.8  
福井市立郷土博物館「極楽—北陸の浄土教美術」2005.3  
奈良国立博物館編・発行『法隆寺展目録』1981.11  
奈良国立博物館『親と子のギャラリー 仏様の彩り』2007.7  
奈良国立博物館『台風被災復興支援 巖島神社国宝展』 2005.1.2  
神奈川県立金沢文庫編『金沢文庫の名宝』1993.4  
陽明文庫・石川県立歴史博物館編『近衛家陽明文庫の名宝』1988.4  
奈良国立博物館編・発行『第五十七回『正倉院展』目録〔平成十七年〕』2005.10  
奈良国立博物館編・発行『第五十八回『正倉院展』目録〔平成十八年〕』2006.10  
『実践女子大学文芸資料研究所別冊年報Ⅰ』1990.2

### 【データベース】

- 国文学研究資料館・日本古典文学本文データベース [http://base3.nijl.ac.jp/Rcgi-bin/hon\\_home.cgi](http://base3.nijl.ac.jp/Rcgi-bin/hon_home.cgi)  
漢字規範データベース<http://www.joao-roiz.jp/HNG/>  
東京大学史料編纂所データベース<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>  
東洋文庫<http://www.toyo-bunko.or.jp/>  
龍谷大学電子図書館貴重書画像データベース <http://opac.lib.ryukoku.ac.jp/kicho/exhibi/top.html>

『選択本願念仏集』は、佐々木勇先生 他が作成中の『選択本願念仏集』語彙索引用のために作成した本文データを、『西方指南抄』『教行信証』は、同じく佐々木勇先生が作成中の索引を利用させて頂きました。心よりお礼申し上げます。

### 【図書】

- 池田寿『日本の美術 第480号 書籍・典籍、古文書の修理』至文堂 2006.5.15  
市古貞次・大曾根章介編『国文学複製翻刻書目総覧』日本古典文学会・貴重書刊行会  
1982.12  
市古貞次・大曾根章介編『国文学複製翻刻書目総覧』日本古典文学会・貴重書刊行会 1988.7  
尾上陽介『日本リブレット30 中世日記の世界』山川出版社 2003.5  
神野志隆光『漢字テキストとしての古事記』東京大学出版会 2007.2  
小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』東京大学出版会 1991.1

佐藤喜代治編『国語学研究事典』明治書院 1977.11  
重美一行『教行信證の研究』法蔵館 1981.7  
白川静『【普及版】字統』平凡社 1994.3  
杉本一樹『日本の美術 第440号 正倉院の古文書』至文堂 2003.1.15  
杉本つとむ『漢字入門—『干禄字書』とその考察—』早稲田大学出版部 1972.5  
高橋秀樹『古記録入門』東京堂出版 2005.11  
築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会 1963.3  
東京大学教養学部国文・漢文学部会編『古典日本語の世界 漢字がつくる日本』東京大学出版会 2007.4  
北京大学図書館編『中国版刻図録』朋友書店 1983.9  
松蘭斉『王朝日記論』法政大学出版会 2006.5.25  
湯山賢一『日本の美術 第500号 天皇の書』至文堂 2008.1.10  
頼富本宏・赤尾栄慶『写経の鑑賞基礎知識』至文堂 1994.10  
広島大学文学部国語学教室編『校本干禄字書』 1961.5

## 【論文】

乾嘉彦「同形異字小考—西本願寺本万葉集を資料として—」国語文字史研究会・前田富祺編『国語文字史の研究 一』和泉書院 1992.9  
井上幸「古代日本における『文字辨嫌』の存在意義少考」『武庫川国文』第66号 2005.11  
沖森卓也「漢字の受容」前田富祺・野村雅昭編輯『朝倉漢字講座① 漢字と日本語』朝倉書店 2005.3  
柏原卓「石橋生庵日記の異体字」国語文字史研究会・前田富祺編『国語文字史の研究 一』和泉書院 1992.9  
小林恭治「観智院本類聚名義抄の筆跡による帖の類別について」『訓点語と訓点資料』no.94 1994.9  
今野真二「定家以前—藤末鎌初の仮名文献の表記について—」『国語学』vol52.no1 2001.10  
齋木一馬「古文書と古記録」赤松俊秀他編集顧問『日本古文書学講座第1巻 総論編』雄山閣出版 1978.6  
佐藤稔「異体字」佐藤喜代治編『漢字講座 3 漢字と日本語』明治書院 1987.11  
佐々木勇「親鸞筆『佛阿彌陀經』『佛説觀無量壽經』被字音注漢字索引(上)」『比治山女子短期大学紀要』第二七号 1992  
佐々木勇「鎌倉時代における『選択本願念佛集』訓点本と仮名書き本の漢字音—仮名書き本に見られる親鸞の仮名遣い」『国語と国文学』 2002.7  
笹原宏之「日本製漢字「𪗇」の出現とその背景」『訓点語と訓点資料』第百十八輯 2007.3  
紅林幸子「書体の変遷—爾・尔・尔—」『訓点語と訓点資料』第百十八輯 2007.3  
高橋敬一「今昔物語集における避板法・変字法」『福岡女子短大紀要』1982.6  
高橋忠彦・高橋久子「顧眄の異表記について—幽霊語としての「顧眄」—」『日本語と辞書』第十二輯 2007.5  
高梨信勝「字書と漢字」前田富祺・野村雅昭編輯『朝倉漢字講座① 漢字と日本語』朝倉書店

\*1 杉本つとむ(1972)より引用。

\*2 前田富祺は、「位相」を次のように定義する。「言語というものは、同じ時代においても、言語を使用する人が属している社会集団がどのようなものであるかによって違ってくる。つまり、話し手が属する地域・性別・年齢・職業・身分・教養などによって、ことばが違ってくるわけである。また、同じ人の使う言語であっても、言語社会のどのような場面で、どのような相手に対して使うものであるのかによって、違いが出てくる。例えば、公的な場であるのか私的な場であるのか、相手との身分関係はどうか、会話によるのか文書によるのかなどの違いによって、いろいろな相違が出てくる。このような、言語社会における人や場による言語の違いを位相と呼び、言語の位相的な違いを研究する分野を位相論、特定の位相的な場で使われる言語を位相語と呼ぶ。」(佐藤喜代治(1977)所収、前田富祺「国語の位相」より引用。)

\*3 引用に際し、歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに、漢字の字体は当用漢字字体に改めた。

\*4 井上(2005)は、冠部を次のように分類・考察している。

「いわゆる「はつがしら」の字体には、大まかに分けると、先にふれたような上部左側の第一画目を書くかどうか(「フ」状(現在の「はつがしら」))か、「ク」状(「祭」字の上部)のように書くか)の二形がある。本稿では「フ」状に書く場合をA形とし、「ク」形で書く場合をB形とする。また、「共」の上部を書く場合があり、これをC形とする。(中略)これらの使用状況を総じて見ると、各字において、一方の書き方が定着しているという状況は認めがたく、両字(引用者注:「フ」状の「はつがしら」と、「ク」状の「はつがしら」)が混用されていることが分かる。(中略)特に「發」字あるいは「發」を含む字の場合、C形で書くことが多く、一定の傾向が見られる。このような傾向を見ていくと、このAB両形の混同を避けて定着していたように見られる。(後略)」

筆者は、井上のいうA形・B形・C形ではなく、A型、B型の区別を用い、「發」の字体を分類した。なぜなら、井上のいうA型・B型の差は、「発」と、「発」を含む字においては、字形の差であって、字体の差ではないと考えるためである。そのため、【例】に示したように、A型は「字形」がそれぞれ異なっても、「字体」は同じものだと認定した。

\*5 A型は観智院本『類聚名義抄』より、B型は黒川家本『色葉字類抄』よりそれぞれ引用した。

\*6 高橋敬一(1982)では、「大部分隣接する二文もしくは構造の類似する相近き章段の小さな字句に表れる」、「同一の対象を異なる表現で示す方法」を「非避法」とし、「単に文字のみを異にする手法」を「変字法」とする。本論文でもこの定義に従う。

\*7 高橋秀樹(2005)では、藤原実頼・師輔兄弟の日記以後の日記について、「それまでの日記とは、質的にやや異なると考えられそうであり、この時期を私日記の拡充期と捉えたい」と

言う。これは、藤原道長時代の「日記」が、「私的日記」であったことを示す。柏原(1992)では、江戸時代の儒学者・石橋生庵の「私日記」について、「主君三浦氏の動静に触れる事が多いために、資料として主家に借り上げられたもの」で、生庵もそのことを意識していたらしく、「現存の日記は、一部に草書体の日があるものの、原則として楷書体で清書しようとしており」「主君やその周辺の日を予想した、半ば公的な性格が見て取れる」。しかし、「極めて私的なことを記すような、記事の上での自由さが先ず挙げられる」という。時代は異なるが、「日記」の公的側面と私的側面とを如実にもの語る説であると判断したため、紹介する。

- \*8 興福寺本『大慈恩寺三藏法師傳』でA型が優勢な巻は、巻二(A:B=10:1(以下同じ))、巻七(9:1)、巻八(9:2)、巻九(15:2)である。B型が優勢な巻は、巻一(1:18)、巻五(3:17)である。用例が少ないため、差が出ない巻は、巻三(2:1)、巻四(5:4)、巻六(1:3)、巻十(4:1)である。「撥」は一例あり、Ba型である。「癈」も一例あり、Bb型である。「廢」は四例あり、Ba型が二例、Bb型・Bc型が一例ずつある。これらも合わせると、A型は五十九例、B型は五十五例となり、ほぼ同数である。
- \*9 小林恭治(1994)他、観智院本『類聚名義抄』の偶数巻と奇数巻で書記者が異なることを指摘する先行研究があるため、本論文でも、偶数巻と奇数巻を分けて考察した。
- \*10 振仮名もそのまま引用した。
- \*11 掲げた資料は、北京大学図書館(1983)に掲載された『宋刻本藝文類聚卷第八』(上)、宋紹興明州刻通修本『文選注卷第三十四』(下)の一部である。
- \*12 掲げた資料は、(表2④19)唐招提寺蔵『法華経卷八』である。
- \*13 今回は、藤原道長筆の仏典の内、表1④13の一部しか、確認できなかった。この仏典では、A型も一例あり、変字法である可能性も否定は出来ない。今後の調査が必要である。
- \*14 「撥」「癈」「廢」を含む。
- \*15 徳川美術館蔵『妙法蓮華経卷第八』(懷良親王筆)(正平二十四(1369)年)(巻尾のみ確認した。)では「発」が一例あり、Ac型(cは「弓」と「爿」)である。
- \*16 京都国立博物館蔵『足利尊氏願経』(版本)(文和三(1354)年)(巻尾のみ確認した。)では、経典の後に願文が付いており、「発」がBc型(cは「方」と「爿」)である。
- \*17 宮内庁書陵部蔵『日本書紀卷第二』(興国二(1346)年)(全て確認した。)では「発」は一例あり、Ac型である。「撥」は三例あり、Aa型が一例、Ac型が三例である。cは崩して書かれているが、「爿」は確認できる。